学校教育（広島大附属小）２００８年９月号　原稿
２５字×２１行×１２枚＝６３００字

特集「学習集団を組織する視点と方法」

あーよかったな　あなたがいて
～支え合う仲間を育てる～

若手教師パワーアップセミナー「元気が一番」塾　主宰　仲　島　正　教

１．肩を組んで進むわたしたち

私は教室の前に、こんな言葉を掲示していました。

ひとりが困れば

ひとりが困れば　みんなで助け
ひとりの問題を　みんなで考え
ひとりの喜びを　みんなで喜び
肩をたたきながら　進むぼくたちです

ひとりの足りないところは　みんなでおぎない
ひとりが進めば　みんなが進み
みんながみんなを　よくし合いつつ

肩を組んで　進むわたしたちです

私はこんな関係を子ども達につくっていきたい、そう思って学級づくりや授業づくりを行ってきました。

２．「仲よし」をどう教えるか

「仲よくしなさい」私たち教師は、この言葉をどれだけたくさん言い続けてきたことでしょう。でも子ども達は「仲よくしなさい」の言葉だけで仲よくなんかならないのです。大事なことは「仲よし」ってどういう事かを行動を通して学ばせることなのです。

１年生の１学期、初めての給食ではこんなことが度々起こります。

「先生、牛乳びんが倒れてズボンにかかったよぉー」

とＡ君は大泣き。こんな時にどうするかというと、先生が全部拭いてやるのではなく、雑巾を２枚持っていき、となりの子にも渡して

「Ｂくんもやってね」

と一緒に手伝わせてしまいます。訳のわからないままＢ君も一緒に拭きます。そして拭いたあと先生は

「Ａ君よかったねえ。Ｂ君が手伝ってくれたよ。Ｂ君ありがとう！」

とＡ君とＢ君の頭を撫でながらしっかり誉めてやります。二人とも照れながらニコニコしています。そんな姿をクラスの子ども達は「誉めてもらっていいなあ」と見ているのです。子ども達はそういう光景を何度か見ているうちに、同じようなことが起こった時、今度は自分たちが先生より先に雑巾を取りに行き、拭き始めます。子ども達だけで全部片付けてしまうのです。そして先生が

「Ｃさん、よかったね。先生がしなくてもＤ君とＥさんが全部やってくれたね。あなたたちは『仲よし』だね。いい『友だち』だね」

と声をかけながら誉めてやります。するとＣさんもＤ君もＥさんも、とっても満足そうないい表情になります。

実は、子ども達は最初は「先生に誉めてほしい」が動機になって動き出しますが、だんだんと自分がしたことで「友だちが喜んでいる」姿を見て「自分が役に立っている。してあげてよかった」とうれしくなっていくのです。そして「してあげた」「してもらった」という関係はとっても気持ちのいいものだ、これが「仲よし」なんだ、これが「友だち」なんだと実感していくのです。

牛乳がこぼれた時、先生が拭いてしまう方が簡単です。しかしこんな機会を捉えて、子ども同士を絡ませること

によって「仲間」を意識し、「学習集団」に育っていくのです。たかが牛乳、されど牛乳です。「仲よし」や「友だち」は、道徳の時間だけでなく、こういった日常の生活から学ばせていくのです。

２．いつも目標を意識し、目標に返すこと

学校にいくと、どこの教室の前にも「目標」が掲げられています。その内容は教科のことではなく、たいていは「仲よし」等の仲間関係の言葉です。例えば、「みんな仲よく協力しよう」そういう学級目標はよくあるパターンです。ここで大事なことは、それがただの「壁目標」になっていないかということです。掲げてあるだけでは意味がありません。

掃除の時間に、協力して早く出来た班があれば、

「１班は、トイレの掃除がとっても早く出来ました。それはなぜかというと、みんなが協力したからです。ほら黒板の上をみてごらん。学級目標の通りだね」

と必ず学級目標に返します。国語の時間に協力して班学習をしていたら、

「２班は、国語の時間にお互いに漢字を教え合って勉強していたよ。ほら黒板の上を見てごらん。２班は学級目標を達成しているよ。よくがんばったね」

このように、常に「学級目標」を意識させることによって、子ども達は日常の生活を意識し、行動が変わっていくのです。

３．「班活動」から「学習集団」に

給食や掃除等、生活の中でつながっていくと、自然に授業中にもそのつながりが生かされていきます。そのためには教師からの一方通行の授業をしていては何も変わりません。ちょっとしたことでいいのです、子ども同士が絡む場面をつくり出すことです。例えば算数の練習問題をした時、出来る速さがみんな違います。

「先生、出来ました。次は何をしたらいいですか」

「じゃ、次は何ページをしなさい」とすぐに課題を出してはだめです。まずは

「それは自分で考えてごらん」

と考えさせます。すると最初は自分で新しい問題を見つけて取り組む子がほとんどですが、中には班の仲間に寄り添い、教えてくれる子が出てきます。その時にみんなに言います。

「今ねＦ君は、問題が早くできたので、班の友だちに教えてくれていました。黒板の上の学級目標を見てごらん。この班はまさに『支え合う仲間』だね」

と、紹介してやります。すると次から次へと「教え合う」班が増えていきます。掃除や給食等の班活動でしかつながっていなかった子ども達が、授業を通してつながる学習集団になっていくのです。

しかし、こういう「教え合う」学習は、時に非難されることがあります。わかる子はどんどん進みたいのに、犠牲になっている。出来る子の力が伸ばせていないと。

確かに一部そういう面もあるかもわかりませんが、少なくとも私はそうは感じていませんでした。出来る子は自分の持っている力を振りしぼって、出来ない子に教えてくれます。出来る子はその教える過程の中で自分の力も定着させていたのです。結果的には、出来る子も力が向上し、テストでも高得点をとっていたのです。こういう学習集団になれば、お互いに力は向上していくと私は確信しています。

☆私はいつもよりすっごくわかりやすかった。なぜかというと、班の人に教えてもらったからです。先生に教えてもらうより、友だちの方がわかりやすいです。先生は大人だけど、友だちはいっしょの子どもだからです。（４年Ｇ子）

☆今日算数プリントをしました。みんな、人にきいたり、教えたりしました。このことが黒板の上に書いてある「支え合う仲間」だと思いました。（４年Ｈ男）
☆この前の時間、ぼくがＩ君に算数を教えたら、Ｉ君は今日のテストで１００点をとりました。Ｉ君から、「ありがとう、Ｊ君のおかげや」と言われ、本当にうれしかった。（４年Ｊ男）
☆私は１年生からずっと先生と一緒に勉強してきました。でも今は先生とじゃなく友だちと勉強しているのです。とてもむずかしいです。でもなんだかワクワクしています。（５年Ｋ男）
☆６年生になって算数がおもしろくなった。それはみんなでやっているから。みんなが教えてくれるから。「算数がおもしろいなあ」と思ったのはこれが初めてです。これからもみんなで教え合って、みんながわかるようになっていきたいです。これからもみんなでがんばるぞ！文章題はこわくない！（６年Ｌ子）

４．力のある「学習集団」は厳しい

例えば、バスケットボールの学習のあとに作文を書かせると、子ども達は

「みんなが協力してよいチームになってきた」

と言うので、それはどんな場面か？と問うと

「失敗した時も励まし合ったから」

「今までは、ミスした時には、けなされたのに、ドンマイドンマイって許してくれた」

（※ドンマイ・・気にするなという励ましの言葉）

事実よいチームになってくると、こんな言葉がよく出るようになります。確かに「いいこと」ではあるのです。しかし同時にそれはなれ合いや甘さにもつながるのです。

こういう時、もう一度「本当の仲間ってどんな友だちだろう」ということを考えさせます。みんなで話し合いをさせます。すると、必ず「いいことはいいと言い、ダメなことはダメとはっきり言える関係」という意見が出てきます。本当の仲間とは、互いに高め合うものだということを子ども達は再確認します。

すると、授業中の言葉が変化します。今までは、ミスを「ドンマイ」と許していたことが、

「ボールを見ていないからだよ。しっかり見なくちゃ！」

「何も考えずに立っているだけではダメ。作戦を意識しないとダメ！」

とはっきり言えるようになります。

４年生の体育でこんなことが起こりました。

Ｍ子は先天性下肢障害のある子で、歩くときには装具をつけています。そのＭ子が装具をつけながら、体育でボールゲームをした時です。同じチームの子ども達は、足の不自由なＭ子を生かそうと必死でがんばります。キャプテンのＮ男はＭ子の分も走ると言ってコートを駆け回り、Ｍ子にシュートを打たそうとします。Ｍ子がコート上で転けるとチームメートがすぐに駆けつけ、すぐに起こし、試合に戻ります。この光景はまさに「支え合う仲間」そのものです。私もそんなチームを「よいチームになったね」と誉めていました。

しかし、授業が進むにつれ子ども達は変わっていきました。Ｍ子が転けるとチームメートは駆けつけますが手は出しません。

「Ｍ子、自分で立ってみろ！」

「よしっ、立てた！」

チームメートは、Ｍ子のために何をすべきかと考えたのです。それ以降、Ｍ子はたくましくなりました。自分に出来ることを精一杯がんばる子になってきました。

本当の優しさとは「してあげる」ことではなく、一緒に悩み、一緒に考え、一緒に伸びていくことなのです。低学年で「してあげる」「してもらう」関係の子ども達は

やがて「一緒に伸びる」関係に成長していくのです。

もちろんこの関係は国語でも算数でも同じです。いい加減な態度を子ども達は叱ります。一生懸命にやったけど結果が悪かったときは「ドンマイ、次がんばればいいよ」と言いますが、一生懸命にやらない時「ドンマイ」とは言わないのです。力のある「学習集団」は厳しいのです。

M子は作文に私のことを次のように書いていました。

・・・・先生はクラス全員に平等に目を向け、心を砕いてくださる優しい先生でした。でもけっして甘い先生ではありませんでした。特に私に対してはそうで、障がいを持っていることで自分を甘やかすことは許されず、目の前に立ちはだかる困難に対しては、自分の頭で考え自ら行動、挑戦し、時には積極的に人に協力を求めることが必要であると教えられた気がします。先生は私が困ったことに直面しても簡単には助け船を出してはくれず、ただ見ているだけということが多くありました。その厳しい態度はクラスの仲間達にも伝わり、みんなが本当の優しさを知ったことで、私たちは「支え合う仲間」という学級目標を実現できたのだ

と思います。先生は「自分を輝かすのは自分自身であること」や「誰かの支えがなければ人は生きられない」ということを私たちに教えてくださいました。・・・

５．こんな「仲間」になってほしい～卒業試験～

６年生の最後に私はこんな卒業試験をしました。

「このクラス３５人いるけど今から『人間のいいもの順に一列に並べ』！誰が一番いい人間や、誰が一番悪い人間や、言うてみろ！さあ１列に並びなさい」

そんな突然の先生の呼びかけに子ども達は反発します。

「先生何を言うのですか。先生は今まで、人間にはそれぞれ個性があって、一人ひとりにいい所や悪い所があり、けっして順位はつけられないといつも言ってたじゃないですか」

その後も私と子ども達の言い合いは、続いていきましたが、何か変だと気づいた子ども達は

「先生は職員室に行って！あとは私たちだけで考える」

と、とうとう私を教室から追い出してしまいました。

そこから子ども達の白熱の議論が始まりました。

考えに考えぬきました。１時間後、日番の子が私を呼びにきました。そして教室に戻ってきた私に子ども達はその答えを見せたのです。

子ども達は、教室の前を広くして、そこで、男女が交互になって、中を向いて、一つの輪をつくっていたのです。私はその輪の中に静かに入り、

「よく考えたな、これが正解や。こうやって一つの輪になると、全員の顔が見えるだろ。うれしそうな顔をしている友達がいれば一緒に喜べるし、悲しそうな顔をしている友達がいれば、そばに行って声をかけてあげることができるだろ。こうやって輪になれば、人間はつながっていけるんだよ。これからの人生、苦しいこともあるだろうけど、人間はこうやって輪になっていけば、それを乗り越えていくことができるんだよ」

５．あーよかったな　あなたがいて

卒業試験のあと、子ども達は口々にこう言いました。

「私がここまでがんばれたのは、Ｎさんのおかげです。Ｎさんに会えて、本当によかった」

「ぼくが算数を好きになったのはＯ君が教えてくれたからです。Ｏ君がいて、本当によかった」

「あーよかったな　あなたがいて

あーよかったな　あなたといて」

学習集団とはこんな仲間のことだと私は考えています。